



## 小さなできたを積み重ねて

幼児課 参事 本山 真知子

今年は、そっと過ぎていきました。例年のとおり、梅雨があり、カッと暑い日もありましたが、そっと夏が過ぎていきました。いつの間にか、日の出が遅く、日の入りが早くなり、秋が深まり、冬になっていました。今年は、いろいろありました。でも、そっと過ぎていったという印象があります。

この秋、コロナ禍の中、教職員のみなさまが、子どもたちの発達や思いを最優先に考え、工夫して、運動会などの行事を開催されたことについて、敬意を表します。

保育園、幼稚園、幼児園では、例年の運動会を運動参観とし、学年ごとに、時間を分けたり、別日にしたり、参観者の人数を制限したり、参観場所を個々に設定したりするなどの工夫をし、かけっこやリレー、ダンス、親子演技などの内容も配慮しての実施となりました。

参観の機会があり、天気の良い日にある園の運動参観に行かせていただきました。参観者の人数制限があったり、他学年の園児の参観が無かったりし、演技中は声援のない、静かな状態でしたが、出演している子どもたちの表情は大変充実したもので、動きもきびきびとしていて、自信が伝わってきました。

子どもたちは、保育者の促しにより、次に何をするのか、理解し、行動することができていました。中には、指示に気づかない子どももいましたが、他の子どもたちの行動を見て、自ら気づき行動することができていました。また、演技後は、使った用具を決められた場所に各自が真剣な表情で、順番に片付ける姿が見られました。

この活動の中に、「幼児期の終わりまで育ってほしい姿」(10の姿)の「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝えあい」「豊かな感性

と表現」があり、これらの姿が融合され、子どもの育ちにつながっていることを実感しました。

そっと過ぎていったと思っているのは、私だけで、確実に子どもたちは、日常の小さな積み重ねを経験し、学びを深め、力をつけ、育っていました。当たり前のことですが、この当たり前のことに気づくことができた時間でした。

日々の活動の中で、子どもが「これならできる」「ちょっと頑張ればできる」「できた」という積み重ねが経験できる保育教育を行い、成長している姿を子ども自身と保護者と共に喜び合い、自尊感情を育てていきたいものです。

子どもたちが「人より、ほんの少し努力するのが辛くなくて、ほんの少し簡単にできること」(NHK朝ドラのセリフより)に出会えるようエールを送ります。

\*\*\*\* \*

2020年11月15日に、栗東市役所にて、第55回滋賀県人権保育研究集会を開催いたしました。例年は、滋賀県内の加盟者の参加で全体会を行い、4部会で提案、討議を行いますが、今年は、全体会を中止し、参加者なしで、各部会ごとの提案、講師助言をDVDに収録し、滋賀県内の各部会加盟園に配布、各園にて視聴し、討議していただき、その内容を冊子にまとめる方式としました。コロナ禍の中、提案をまとめることは、大変なご苦労だったかと思いますが、各園の提案は、人権を第一に考え、子どもの最善の利益のために、できることをできる形で実践されていることが伺え、深い学びができる良い機会となりました。

それでは、みなさま、良いお年をお迎えください。





## 「自粛警察」が話題になっていた頃のこと ～認め合うことの大切さについて～

栗東市教育委員会事務局 人権教育課  
課長 岸 田 修

2020年は、激動の年でした。自分にとっても、「こころの底」が揺さぶられたように思います。これまでも身近な人の死や大きな災害の後で「こころ」を大きく揺さぶられたことはありましたが、今回は、表れにくい底の部分が揺さぶられたように思いましたので、私が感じたことを少し提供します。

今回の「コロナ禍」では、「誤った正義感」や「自分本位の責任感」が見られる事象がありました。

記憶されている人も多いと思いますが、緊急事態宣言や有名人がコロナ感染によって命を失ったことに関する報道が連日なされていたころ、「自粛警察」と呼ばれる行動が各地でみられました。典型的なものは、他県ナンバーの車両に対するクレームなどでした。クレームを発している方は、「自粛期間なのに非常識だ」、「こういう人が感染を広げているのだ」などと一方的に決めつけてしまったがためにこのような表現を取ったと考えられます。これは根底に「感染から守るために正しいことをしている」との意識（正義感か？）があるがための行動なのでしょう。

もちろん、「他県ナンバー車両」イコール「他県からのウイルス持ち込み」ではありません。私の近所で実際に、他県ナンバーで住宅の前に駐車している車を見かけましたが、そのフロントガラスには「〇〇県ナンバーですが、滋賀県在住です」と大きく書かれていました。自衛手段として書かれていたのですが、その頃は、誰が誹謗中傷をしてくるか分からないような雰囲気がかつて社会の中にありました。

そのような状態からしばらく経過し、やや落ち着きを取り戻してくると「自粛警察」のことも忘れられていきました。振り返ってみると、これらは明らかに「偏見」による「差別」的な行為です。

非常事態などで、冷静さを見失うと、自分勝手な価値観で物事を不当に判断してしまうのは、人間の弱さなのかもしれません。

しかし、たとえそうであっても「差別・偏見」はする側に問題があるのです。コロナ禍では、他にも医療関係者や運輸業者への誹謗中傷も見られました。人間の弱さだから不当な態度が、「やむを得ない」のではなく、一人ひとりが困難の中であっても「他者への思いやり」を持ち続けることが大切だと思います。

では、このような事を書いている私自身はどうだったのかというと、緊急事態宣言のころ、通りすがりの車両を見て普段よりもナンバーが気になり、「あの車、滋賀県と違うなあ」と心の中で考えてしまったことがありました。そのあと、先ほどふれた車の張り紙を見て、家族との会話の中で、滋賀県ナンバーじゃないから他県からやってきたとは限らないし、家族の急病や事故でも自粛を守るのは「絶対」ではないことを確認しました。

とはいえ、誹謗中傷を実際に表面化させてしまった人と根本で同じ部分があることに気づき、「まだまだ感覚が甘いなあ・・・」と痛感しました。

現在、インターネットなどで、自分の意見を発信する方法がありますが、中には「自分を守って何が悪い」という論点で、客観的には不当な内容であっても、一方的に自己を正当化するというものもみられます。

確かに、「自分を守る」ことだけを捉えたら間違いではないでしょう。でも、自分を守るために他者を傷つけてもよいということではありません。お互いを認め合って、ともに尊重する方法を探し続けることが、本当の意味での「守る」につながるのではないのでしょうか。





## 「子ども一人一人を大切に」

治田西幼稚園



お誕生日バッジ  
嬉しいな



ぎゅー！  
大好きだよ

毎月初め、誕生月の子ども達に誕生日バッジをつけています。誕生日バッジをつけている子どもを見かけると友達や保育者、おうちの方から「おめでとう!」「〇歳になったんだね」と温かいメッセージが伝えられます。また、誕生会(3・4・5歳児)では、おうちの方から愛情のこもったメッセージとともにぎゅーっと抱きしめてもらい、子ども達は、照れながらもとても嬉しそうな表情を見せてくれます。その時、同じ空間にいる大人も子どもも心の中がぽかぽかと温かくなり幸せな気持ちに包まれます。子どもにとっても大人にとっても大切な誕生日。一人一人の存在を大切にできる行事の一つです。

このように日々の生活・遊びの中でも、子ども達を真ん中に据え、園と家庭がともにつながり子ども達一人一人を大切に、『自分が好き・家族、友達が好き・みんなが好き』と感じられる子どもの育成に取り組んでいます。



## 保幼小の円滑な接続・連携推進において

栗東市立大宝東小学校

### 5さいじのみなさん



### しょうがっこうで まってるよ



〇1年生から5歳児さんへメッセージビデオレターをお届けしました!心を通わせ合うことができる交流を計画中。

本校は開校15年を迎え、子どもたちとともに、保護者・地域の方々にお支えをいただきながら歩んできました。しかし今年度はコロナ禍の中、大勢で集ったり話し合ったりすることが大変難しい状況であり、これまでの取り組みを検証し、知恵を出し合い、やり方を変えたり内容を工夫したりして取り組んでいるところです。

特に子どもたちの学校生活への円滑な移行のために子ども同士の交流の場や学校間の連携は重要と考え、活動に取り組んできました。

連絡会での情報共有や意見交換だけでなく、子ども同士の交流として、1・5交流(1年生と5歳児)、5・5交流(5年生と5歳児)はビデオレターやメッセージの交換など可能な形で、また教職員間は交流研修として小学校体験、園体験を実施しています。子どもたちは人とのつながりの中で異なる場の環境・雰囲気慣れ親しみ、教職員は体験から学んだことを効果的なカリキュラムの作成や改善に生かすことができます。子どもたちが学びを豊かにし安定した学校生活を送れるように、今後も場の設定の工夫により新しい形の交流を模索していきたいです。



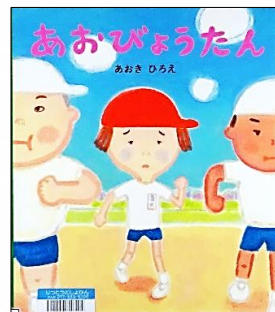
## 図書館司書より先生にすすめたい一冊

### 『あおびょうたん』

あおきひろえ・作 理論社

背が低く、運動も苦手なわたしは、「あおびょうたん」というあだ名をつけられ落ち込むが、大好きな図工の時間に描いた絵をみんなにほめられ、自信をつけていく。マイナスイメージだったあだ名を受け入れていくわたしの力強い姿に勇気づけられる絵本。子どもの“個性”について考えてみませんか。

《図書館 田村薫》



### 『ギフト、ぼくの場合』

今井恭子・著 小学館

両親の離婚を境に、優太の生活は一変した。一日中働く母を気づかい、出費を気にして修学旅行をあきらめた矢先、幼い妹が急死する。天国の妹のためにできることを模索するうち、自らの才能に気づき、将来の夢を見つける。不遇な立場に置かれた少年が、地に足をつけて将来を見せる物語。幅広い年代に手に取ってほしい。

《図書館 田村薫》

### 『プラスチックモンスターをやっつけよう!』

高田秀重・監修 クレヨンハウス

今年7月からレジ袋の有料化が始まった。他にも、ストローを紙素材に変えたり、マイボトルに汲める給水スポットを設置したり…今私たちの生活に、新しい風が吹いている。いつも平気で使っていたプラスチック製品、なぜ使ってはいけないの?知っているようで知らなかったプラスチックの公害をわかりやすく解説した、大人にもお勧めできる一冊。

《図書館 清水 優》



### 『風になる』

東田直樹・著 ビッグイシュー日本

人の顔を覚えられず、名札でクラスメイトを記憶した。ラジオ体操で手足の存在を自覚できるようになった。文字は書けたけれど絵を描く意味がわからなかった。

通常の会話がほとんどできない自閉症の著者が、自らが見てきたもの、感じてきたことを綴る。「人は誰もが、違う景色の中で生きているはず」そう言う著者の見ている風景に、そっと寄り添ってみてほしい。

《図書館 玉川真弓》